



令和5年度

茨城県優良図書紹介【小学校高学年向け】



『たぶんみんなは知らないこと』

福田隆浩 著、しんやゆう子 絵（講談社）

生まれた時から障がいがある5年生のすず。みんなのようにおしゃべりができなくても、みんなと同じことができなくても、いつだってすずは頭の中で話をしています。声にならない、すずのおしゃべりを一緒に聴いてみませんか。



『じいちゃんの山小屋』

佐和みずえ 著、カシワイ 絵（小峰書房）

お父さんとの大げんかをきっかけに、じいちゃんと暮らすことになった航太。そこは、電気もお風呂もトイレもない山小屋でした。「よもだ(変わり者)」と村の人に言われながらも自然とともに生きるじいちゃんとの暮らしから自然と人、人と人とのかわり方が見えてきます。



『ラベンダーとソプラノ』

額賀滯 著、いつか 絵（岩崎書店）

“下級生を不登校にしてまでがんばってるなんて、すごいね”

金賞を取るためには学校の合唱クラブで厳しい練習を重ねて努力するのが正しいと思っていたけど…本当の意味での「みんなでがんばる」を考えるヒントになる作品。



『母の国、父の国』 小手鞠るい (さ・え・ら書房)

“差別され疎外されている人には、差別の壁を崩す楽しみがある。”

自分は絶対に人種差別もいじめもしないと思っている人、みんなと同じになることを求められて悲しい思いをしたり困ったりしたことがある人はぜひ読んでほしい一冊です。



『雨の日は好きな人』 佐藤まどか 作、嶽まいこ 絵(講談社)

周りの人と自分を比べて自己嫌悪。どんどんいやな人になっていく。そんな七海を変えたのは雨の日は好きな人でした。「きっとそれぞれ、なにかあるんだろうね。いちいち言わないけれど。」この言葉がストーンと心に落ちます。



『金曜日のヤマアラシ』

蓼内明子 著、中田いくみ 装画 (アリス館)

「ヤマアラシのジレンマ」を知っていますか？人と人とのきより感を表した言葉です。本当の自分、友達とのビミョウな関係、ずっと言えないなやみ。一步をふみ出す勇気がほしい人にさわやかな風が吹きます。



『宇宙食になったサバ缶』 小坂康之/別司芳子 著 (小学館)

福井県の高校生たちがサバ缶の宇宙食を作りました。最初に食べたのは宇宙飛行士の野口聡一さん。そんな夢みたいなのがどうして実現できたのでしょうか。

宇宙や宇宙食に興味のある人にもおすすめです。



『バスを降りたら』 眞島めいり 著 (PHP 研究所)

なやむことは人それぞれ。「何のために学ぶのか」「どんな人になりたいのか」「自分の居場所はどこなのか」…自分と向き合うことは大事ですが、周りの人とのつながりが道を開いてくれることもあります。読み終えた時、なんだか心が軽くなります。



『ちいさな宇宙の扉のまえで』

いとうみく 著、佐藤真紀子 絵 (童心社)

6年間、あっという間なんかじゃない。学校にはいろいろな人がいて、考え方も、大切なものも、守りたいものも、家庭の環境もみんな違う。最後の小学校生活。卒業時にみんなが開く扉はどこだろう。



『ロドリゴ・ラウバインと従者クニルプス』

ミハエル・エンデ/ヴィーラント・フロイント 著、木本栄 訳、junaida 絵 (小学館)

旅人形劇団のクニルプスは悪名高き盗賊騎士の従者になるためゾクゾク森に入り、おてんばな姫をさらい、しゃべるオウムがそれを追いかけて財宝好きな竜と魔術師に出くわします。ドイツの有名な作家エンデが残した、おとぎ話の世界へようこそ。



『きみの鐘が鳴る』 尾崎英子 (ポプラ社)

目標を達成するには努力しなければならない。しかし時間を費やし、ひたむきにがんばればがんばるほど、辛く苦しく、くじけそうになることも…それでも努力した時間や熱量はむだではない。得るものは大きい。